



新・みやぎ・シー・メール第25号

発行：令和元年7月30日

宮城県水産技術総合センター 〒986-2135 宮城県石巻市渡波字袖ノ浜 97-6

TEL: 0225-24-0159 FAX: 0225-97-3444

イガイ養殖技術開発について

気仙沼水産試験場

イガイについて

イガイ *Mytilus coruscus* は東アジアの浅海に生息する在来種で、シウリガイやセトガイなどと呼ばれ、古くから食用とされている二枚貝です。本種は外来種であるムラサキイガイと混同されることが多いですが、在来の種類で大型化することが特徴です。

本県は古くからカキやホタテガイなどの二枚貝類の養殖が盛んですが、近年カキの消費低迷、ホタテガイのまひ性貝毒による出荷自主規制の長期化などが問題となっており、これらの生産を補完する新たな養殖種の開発が求められています。

そこで、大型化し、また市場性も期待できる在来種のイガイの養殖技術開発に取り組んでいます。



図1 在来種のイガイ, *Mytilus coruscus* (左)と外来種のムラサキイガイ, *M. galloprovincialis* (右)イガイの成長

イガイの養殖期間等を把握するために、天然からイガイを採取し、成長試験を行いました。この結果、イガイは3歳で殻高が10cmを超え、大型の個体となることや、養殖試験中にほとんど斃死が見られなかったことから、養殖種として十分期待できるものであることが明らかになりました。

養殖用種苗の入手について

マガキやホタテガイは天然採苗といって、産卵の時期に養殖中の貝類などから生まれた卵が浮遊幼生となり、成長した後、海中に設置しておいた採苗器に稚貝が付着します。この稚貝を養殖に使用します。またカキやムラサキイガイは天然で発

生した稚貝が養殖施設や取水管などに付着して被害をもたらします。しかし、在来種のイガイは養殖施設などへの付着は全く確認されず、磯や岸壁などで散見される程度です。つまり、カキなどのように天然で発生した稚貝を種苗として利用することが困難な種類と言えます。

このことから、当試験場では人為的に採卵し、餌をやりながら幼生を飼育し採苗する人工種苗生産技術の開発に取り組んでいます。しかし、これまで国内でイガイの人工種苗生産についてはほとんど成功事例がなく、好適条件もよくわかっていません。当試験場では、飼育水温、餌などの条件を明らかにし、稚貝を得ることができました。現在、より効率的に付着稚貝を得るための条件解明を行っています。



図2 イガイの浮遊幼生と着底稚貝

- ① アンボ期幼生：殻長約 200 μ m, ② 成熟幼生：殻長約 240 μ m, ③ 着底稚貝：殻長約 300 μ m

イガイの完全養殖

人工採苗で得られた稚貝を成長させ、それを親にしてさらに稚貝を得るサイクルを完全養殖と言います。当試験場では2年前に採苗し、養殖試験を行っていたイガイを今年親として用いて、稚貝を得ることができました。これにより今後は種苗生産に必要な親貝を安定して入手できるようになりました。

今後の展望

今後、養殖技術の改良等も課題ですが、より効率的に採苗養殖できる技術開発に取り組み、地域の特産物となるよう進めていきたいと考えています。

宮城県水産技術総合センター

ホームページ URL: <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/mtsc/>